

與へず。

(二)宮島幹之助。——衣虱と再歸熱「スピロヘーテ」

再歸熱患者又は其居室中の衣虱中には「スピロヘーテ」を有するもの一二〇%あり。其等の「スピロヘーテ」は、大多數、虱の胃中にて早く消失すれども、少數は體腔液中に増殖す。而してかくして發育したる「スピロヘーテ」は毒性強く、猿に容易に感染するものなるが、但し今日迄の研究にては、虱は、再歸熱「スピロヘーテ」の中間宿主なる事明かとなりし迄にて、吸血によりて「スピロヘーテ」を傳播すとの直接證明は未だ施されず。察するに虱の再歸熱媒介は、人の皮膚に微細の擦創あり、且感染せる虱の體が傷きたる場合、體腔液中の「スピロヘーテ」が感染の機會を得るものならん。

(永澤六郎)

雜 錄

●今江潟の「イクシオクセヌス」

水産講習所の所藏標本、石川縣今江潟産のザッコ(ザッコは方言なり。學名は *Acheilognathus tabira* Jordan & Thompson = *A. limbata* Jordan & Fowler, TANAKA, and recent authors, not of TAMMINCK & SCHREGL. 本魚名の査定に就ては、學友) 中に *Ichthyoxenus* を寄生せしむるもの一尾あり。

「イクシオクセヌス」は、種々なる淡水魚の胸鰭の直後に穿孔し、其の腹腔中に入りて寄生する奇異なる等脚類

なり。本邦産の「イクシオクセヌス」(*I. japonensis*)に就ては、一昨年發表したる HARRIET RICHARDSON の論文 (“The Isopod Genus *Ichthyoxenus* HERKLATS, with Description of a New species from Japan.” “Proc. Unit. St. Nation. Mus.” vol. 45, pp. 559—562, Jun. 4, 1913.)あり。余の觀察したる標本も亦、リチャードソンの觀察したるものと同一種なるが如し。

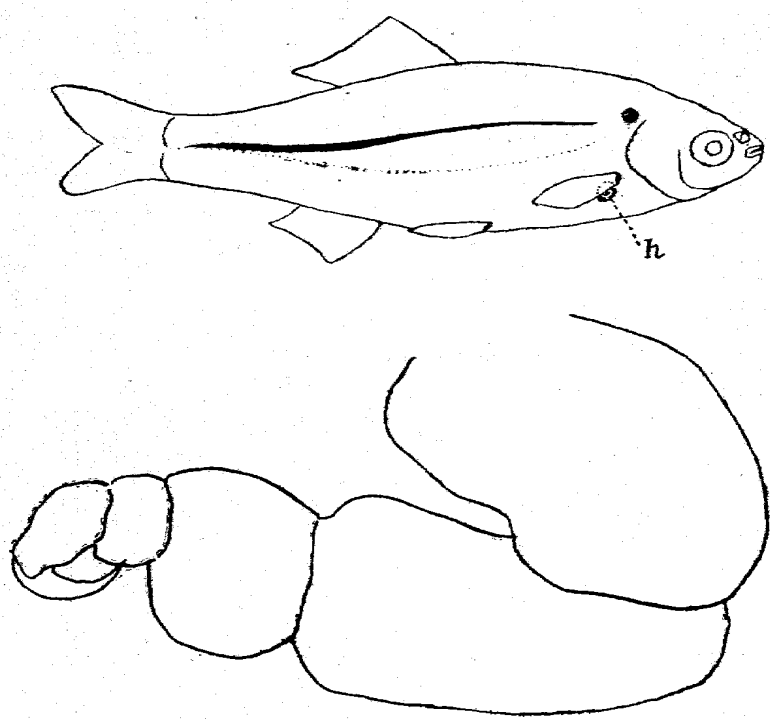
寄生蟲を藏せる *Acheilognathus tabira* は、體長(尾鰭の基部迄測る)七・二糎を有し、其の右側胸鰭の基部直後に、直徑三五糎許りの圓孔あり。而して其の圓孔の入口に、寄生蟲「イクシオクセヌス」の尾部少し現はれありたり。孔より辿りて魚の腹壁を切開したるに、腹腔内に二個の「イクシオクセヌス」互に重り合ひてあり。一個は雄にして右側(魚に就て曰ふ)に在り、一個は雌にして左側に位置せり。(何れも其の腹面を魚の右側に向く。)寄生蟲は、二個共、尾を、前述したる如く、胸鰭直後の開口に置き、頭部を魚の背側に向けたり。併しながら、雄の殆んど、魚體長軸に對し垂直に位置するに對し、雌は其の頭端を魚の脊鰭の方向に向けたる故、兩者の位置關係は、多少、V字形になれり。寄生蟲の周圍には薄壁膜狀の袋あり。之れ腸間膜なり。即ち、寄生蟲は、魚體の腸間膜の袋中(但し一方開口せる)に存在するなり。

余の標本に就ての測定表は下の如し。(參考の爲に、リチャードソンの文中より、雌に就てなしたる測定數字を

並記すべし。雄に就ては、リチャードソンは、唯、"much smaller"と曰ひたるのみにて、何等の數字を掲げず。）

リチャードソンの標本	雌雄	體		頭部		胸部の長さ		胴部の長さ	
		長さ	幅	長さ	幅	長さ	長さ	長さ	長さ
余の標本	♀	一三・五耗	九・〇耗	一・五耗	二・五耗	六・五耗	五・五耗		
	♂	九・五	四・〇	一・〇	一・五	五・〇	三・五		
リチャードソンの標本	♀	一三・〇	七・〇	二・〇	二・五	?	七・〇		
	♂								

(上圖)ザツコ。右側胸嗜の基部直後に「イクシオクセメス」の穿孔せる孔hを示す。
(下圖)「イクシオクセメス」の右側第七脚。雌。三十倍。



(雜錄) ○今江湯の「イクシオクセメス」

余の標本は、其の形態、大體に於てリチャードソンの記載したるものと一致せり、併しながら、細點に至りては、固より、種々異なる處あり。試に二三の例證を擧ぐれば、眼の大きさは、リチャードソンの標本にては(前出測定表に示せるもの)、長徑一耗ありと曰へど、余の標本(雌)にては僅に其の二分の一にて(而も全體としては余の標本の方大なること測定表に示すが如し)、〇・五耗あるのみ。眼の大きさは、リチャードソンが、*I. japonensis*を既知の *I. yeltinghansui*と區別する要點の第一に擧げたるもの故、如上の相違は多少注意すべきものなるやも知れず。尙ほ上記の測定表より見るも、體長に對する體幅の割合、頭部の大きさ、胴部の大きさ等の關係、兩者に於て可なり著しく相違する事を知るべし。

リチャードソンの標本中には、今江湯産の者なし。リチャードソンの報告は、本邦産の「イクシオクセメス」に關する最初にして同時に又唯一のものなるを以て、參考の爲左に、彼が採集觀察したる標本、其の宿主、及採集場所等を再録すべし。

標本	宿主	主	採集場所
雌雄	<i>Achellognathus cyonostigma</i>		Lake Biwa.
二雌二雄	同上		Omi, Lake Yogo.
雌雄	<i>Achellognathus laurcolatus</i>		Funayado, Kiusin.
雄	同上		Omi, Lake Yogo.

雌 雄	<i>Achelognathus taliru</i>	Tako Biwa.
雌	<i>Crathopogon elongata</i>	同 上
二雌二雄	<i>Achelognathus rhombum</i> 尾二	同 上
二雌二雄	<i>Achelognathus limbatum</i>	同 上

「イクシオクセムス」が宿主の腹腔内に寄生する事に就ては、リチャードソンは「簡單に只下の如く曰へり。『It bores a hole in the body of the fish just back of the lateral fin, where it lives with its mate. It enters this cavity when young. As it grows in size, it is unable to leave the body of the fish and becomes many times larger than the opening through which it entered.』併しながら、宿主の胸鰭直後に於ける開口が、寄生蟲侵入當時と少しも變化せざる状態にあるや否やは疑問なり。少くとも、其の部分(即ち開口の部分)は、寄生蟲より常に刺戟を受けつゝあるものなるべしと思惟す。次に、「イクシオクセムス」の寄生場所が、宿主の體腔なるに拘らず、寄生々活をなす他の甲殻類に比し(殊に外部寄生をなす者に比して)も、其の體形に著しき變化の跡無きは(殊に、雄の體形比較的大にして、其の形態、雌と甚しく相違せざる)こと、及、雌雄共に、比較的善く發達せる眼を有する事等)、此の動物の寄生々活を考察する上に注意すべき點ならんか。

リチャードソンに據れば、「イクシオクセムス」屬のも

のにして現今知られあるは、本邦産の者を入れ、僅かに三種に過ぎず。而も、それ等の産地は、ジャワ、ヒマラヤ、日本等、皆東洋方面に屬せり。

「イクシオクセムス」に就て最初に完全なる記載をなせしは HERKLOTS, 1870 にして、彼はジャワ産の *Barbodes maculatus* BLEEKER 腹腔内より一種の等脚類を得、之を *Ichthyogonus jellinghausii* と命名せり。(此の種名は、本種の最初の觀察者 JELLINGHAUS, 1860 の名に因めるものなり。)後一九〇八年に至り、MAJ. P. A. OWENS は同じくジャワ産(バタヴィア附近の [Ti-Serocema]) の *Nemacheilus fasciatus* VAN HASSELL に *I. jellinghausii* の寄生する事を報告せり。次にリチャードソンは(一九一三年、前掲論文)、合衆國國民博物館に藏する雌雄の標本に就き觀察を試み、之を *I. jellinghausii* と同定せり。尤も、リチャードソンの標本と HERKLOTS, SCHIEDTJE and MEINERT 等の圖書・記録とは、總ての點に於て一致すこと曰ふにはあらず、リチャードソンは、雌の胸部第一節の前縁、第七脚の構造等に於て、兩者の間に差違ある事を記述せり。即ち "The first segment of the thorax in the female has the anterior margin deeply excavate in the middle, the excavation being rectangular; the seventh pair of legs have the carpus and merus very much inflated, with the inner margin produced in a rounded expansion; the merus is also much elongated." (リチャードソンの標本

に就ての語なり) 此の標本は矢張りジヤフ(Butenzorg)産のものなれど、其の宿主は不明なり。

第二の種類は *I. montanus* にして、一八八四年、SCHIOEDTJE 及 MEINERT が、ロシア産の *Pantius sophores* より得て記載したるものなり。

最後の種類は、本邦産の *I. japonensis* RICHARDSON なり。*I. japonensis* と *I. jellinghausii* との相違に就てリチャードソンの記述する處は下の如し。"This species differs from *I. jellinghausii* in the larger eye, the larger and more circular form of the terminal segment of the abdomen, the shorter tripod, the shorter and differently shaped nervs of the seventh pair of legs, and the larger head and wider abdomen, compared with the thorax."

I. montanus に就ては、目下、比較考察すべき何等の與件をも有せざる故、何れとも曰ふを得ざれど、*I. jellinghausii* と *I. japonensis* とに就き、リチャードソンの記述し且つ圖説する處、及、余の標本に就て余の爲したる二三の表面的觀察等より推するに、前記兩種の差違は、比較的輕微なる程度のものなるを以て、今後、更に多數の標本を集めて精細なる研究を行はゞ、其の間に中間形生じ、兩者或は同一種に歸着するやも計られず。

(石井重美)

●「カヴァリニア」の群來

「カヴァリニア」 *Carolinia* 屬は軟體動物翼足類に屬す

(雜錄) ○「カヴァリニア」の群來

る動物なり。外洋性にて岸に近く來遊する事尠なきものと見へ、今迄此動物に出會する機會なかりしも、只介殼丈は時々鯉の胃を解剖する時に採集したり。是は同じ翼足類の *Olio* 等と異なり、介殼大きく、丸く、色あるを以て著し。『シボガ』及『チャレンチャー』探檢採集報告に依れば、*Carolinia* 屬にて今迄知られたるもの八種あり、皆熱帶温帶の海に産するものなりとす。

余は昨年十一月駿河灣沿岸の蒲原に赴きたる時、朝、海濱を散歩して、「カヴァリニア」介殼の夥しく打揚げられたるを見て、驚き且喜び、介殼を多數採集したる後、其日或用向にて船に乗り沖合に出でたり。然るに一層驚喜せる事には、沿岸より約一里位の沖迄、此動物が、水表面に近く、無數に浮游し居るに出會せり。介殼の幅、長七耗前後なるに、其よりも廣き幅の翼足を開展し、尙後部兩側より、介殼よりも數十倍長き、五―六寸の觸手狀の一對の紐を後方に延して游泳せり。此動物の介殼の色は、

(1)「カヴァリニア」腹面。(2)同上背面。約三倍半。

